

梁肅の思想と文学

劉, 三富

<https://doi.org/10.15017/2332696>

出版情報 : 文学研究. 76, pp. 55-73, 1979-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



梁 肅 の 思 想 と 文 学

劉

三 富

八世紀の後半から九世紀の前半にかけて、中国では「古文運動」と呼ばれる散文改革運動がおこり、文章の趨勢に漸く変化の兆しが現われ、長く六朝時代から慣習となつて伝わってきた駢文から古文へと移行していったのである。その転換期にいわゆる唐代古文初期作家の蕭穎士・李華・元結・獨孤及・梁肅などが輩出活躍して、後の韓愈や柳宗元両古文大家の先驅者となつたことは既に周知の事実でもある。しかし、これらの作家は、単に古文の創作ばかりではなく、当時の時代情況のもとで新しく起つた學問や思想と密接な關係をもち、中国學術思想史の上から見ても重要な存在であつたことは留意すべきである。

ところで、上に挙げた唐代初期の古文作家たちが、元來どのような時代環境、或いはどのような人間關係のもとで新しい文学理念を意識したのか、またどのような社会的情況のなかで古文という文体改革運動を展開していたのかという問題については、すでに林田愼之助氏の「唐代古文運動の形成過程」^(註一)に詳細な論及があるので、本稿では、考察の対象として、それらの先驅的古文作家たちの中の一人で、しかも従来さほど深く研究されていなかった梁肅をとりあげ、その古文家としてのユニークな創作理念とその思想内容について、私なりに考察を加えていくことにする。

先ずは彼の生涯からふれてゆくことにしたい。どういふ訳か、梁肅の伝記は、『新唐書』の蘇源明伝の末尾に附されている位だけである。それに拠ると、その字は敬之、または寛中ともいい、隋時代刑部尚書梁毗の五代子孫に当り、何代も河南の陸渾地方に住みついていたと記されている。梁肅の伝記について、多少詳しく伝えているのは、彼の親しい友人で、しかも当時文名を馳せていた崔元翰が、彼のために書いた「墓誌」がある。それに拠ると次のような記事がある。

梁君諱肅字寛中、其先安定人、繇漢魏已降、至於隋氏、世有爵位、家貴門盛、刑部尚書邯鄲公曰毗、君之五代祖、以至於唐朝散大夫、右台侍御史、趙王行台記室宜春公曰敬美、公之高祖朝散大夫右台侍御史曰愕、君之曾祖昱、終於莫州任邱令、父達止於率府兵曹參軍事、安卑於燕薊、避亂於吳越、故其世少衰焉。(中略) 貞元九年冬十有一月旬有六日、寢疾於萬年之永康里、享年四十有一。(『全唐文』卷五二三 梁君墓誌)

これからみると、梁肅の先祖は古く漢魏の時代から西奥地の甘肅安定地方の豪族であつたらしく、隋朝刑部尚書長官の梁毗は彼の五代先の祖に当る。ところが彼の祖父と父親の時代になって、その豪勢な華やかさも幾度かにわたる自然的或は人為的の災害を蒙り、ついに梁肅の時代には没落状態となっていた。また梁肅自身が書いた「過舊園賦」の中でわかるように、曾祖父の梁愕の時に、はじめて甘肅の安定から東の河南地方の陸渾に移り、ここで三代先祖父親の梁達時代までは無事暮らしていた。しかし玄宗皇帝開元年間の頃、この長く住みついた陸渾地方が洪水であいにく大水害に見舞われ、やむをえず北へ避難し転々として、漸く函谷関にたどりつき、この地方に定住することになった。(註二)

このことと関連して、さきに挙げた崔元翰が書いた「梁君墓誌」によれば、古文家梁肅が貞元九年(七九三)十一

月、万年の永康里で死亡した年は四一歳であったと明確に記している。この死亡した年から逆算すると、彼は玄宗帝の天宝十二年（七五三）函谷関に生まれたと考えられる。しかし、この生卒年について、我々はどうしても一つの疑問を抱かざるを得ない。つまり彼自ら書き残した「過舊園賦」の序文の始めに「余行年十八、歳上元辛丑に当る」という文句を明言しているからである。上元辛丑（七六一）という年は、安史の乱が起ってから六年目で、戦況もどろぬまの状態がつづき、反乱軍の指導者の一人であった史思明が、子供の史朝義に殺されており、さらに肅宗皇帝が亡くなる年にも当る。もしその年に梁肅が十八歳であったとすれば、彼の生年はどうしても天宝三年（七四四）となり、上述の天宝十二年（七五三）生まれということと、九年も違って相矛盾することになる。このことをはっきりさせるために、先ずその賦の内容を考察してみよう。

余行年十八、歳当上元辛丑、盗入洛陽、三河間大塗炭、因竄身東下、輒涉阨難之中者垂二十年。（序文の部分）

昔予生之三歳、值勅虜之衝奔、徙穹廬於華縣、蒙郊廟於氛昏、皇遊蜀川、帝出朔原、尸逐纔血、烏丸又屯、俄四逆之薦凶、扇燦炭而熱黎元。予既幼、捨此居業、慮性命之所存、始竄跡於許都、又逃刃於夷門、沿汴水之湯湯、棹淮波之翻翻、荷聞詩之前訓、迫馳役而不敢言、截澗河以徑度、趣諸越而休止、在長洲與蘭陵、亦一閭而三徙、嫋嫋兮秋風、湛湛兮春江、傷吾心其何已。（『全唐文』卷五一七過舊園賦并序）

梁肅が二十八歳の時江南の常州より都の長安に赴き、官吏登用のため中央で行なう文辞清麗科に応じて、その時一緒に及第したのは奚陟・劉公亮・梁肅・鄭轅・沈封・吳通元などがいた。それを知る資料は宋代王溥が撰した『唐会要』巻七十六制科挙の項に記している。この賦は梁肅がやがて太子校書郎の官に任ぜられた後、江南に老母がいて侍養を必要とするがために常州へ還ることになった時の作品であろう。したがってその帰途に昔三代も住みついた函谷関に立寄り、舊園を訪れた時の感無量の情を腹藏なく述べている。これをみると、梁肅が三歳の時、つまり天宝十四年（七五五）に安祿山が反乱を起して、洛陽を陥れ、翌十五年六月には更に西へ進撃し、都の長安に迫ったので、

玄宗皇帝は蜀地方へ奔り、肅宗は慌てて今の甘肅省靈武県に逃れ、反乱軍の至る所民は塗炭の苦しみにあったと述べられている。だからもし天宝十四年が彼の三歳の時であったとすれば、明らかに梁肅は天宝十二年（七五三）に生まれたということになる。そうすると梁肅の卒年を貞元九年（七九三）四十一歳の時であったとする崔元翰の「梁君墓誌」説と一致するのである。従って上記の序文に見られる「余行年十八」の「十八」の二字は「九」というのが本来の字で、恐くらは伝写の過程で「十八」に誤ったものと考えられる。（註三a、b）

三

現存する資料にかかる梁肅の少年時代については詳かではないが、しかし彼の晩年の作品と思われる「述初賦」の中から多少なりとも彼の少年時代を伺うことができる。

予幼而漂流、遂寓於江海之上、與鳬雁為伍有年矣。或祿仕以代樵牧、其暇則以羣籍自娛、又嘗染重腿疾、每求長桑氏之術以為療、其他未之思也。（私は幼い頃からさまよって、ついに揚子江下流の江南地方に寓居することになった。そこで雁とともに過ぐすことは幾年もあり、時には給料をもらって薪とりや牛飼いもし、その暇の折りには様々の書籍を楽しんでいた。嘗て足に重いリュウマチにかかたこともあり、よくあちこち長桑公という仙人の靈術を求めて治療に当った。学問と治療以外の事は何も考えずにいた）

『全唐文』卷五一七 述初賦

という発言を、前述の「過舊園賦」と照らし合わせてみると、梁肅の少年時代は殆んど江南の呉地方で過ごし、時間の許す限り、よく色々な書物を読み、広い分野にわたって学問教養に励んでいたことが明らかである。学問・病気の治療の外には、心に何も煩わすことがなかったということは、他の古文家の処世と異なり、どちらかといえば梁肅は無欲でしかも野心を抱かないという自然にまかせた生き方が、その当時の彼の生活方針であったようである。彼の二十歳

頃の作品である「圯橋石表銘」にも、このことについて次のような裏付けを発見することができる。

臨淮之下邳有古圯橋、蓋漢少傳留文成侯張良受神人黄石公兵書之地。（中略）凡志不定則事不成、謀不從則業不
広、留侯不遭黄石、無以定其志、高祖不獲留侯、無以広其業、人神參并、漢道乃行、不然何通降聖賢、君臣遇
合、上得天統、中為帝師、如此其盛也。大歷七年予旅遊次墮履之地、於是鑽石勒銘、揚於邳圯、庶恃力違天、微
功妄作之輩、於以敬戒之爾。（『全唐文』卷五二〇 圯橋石表銘并序）

これは梁肅が若い頃、淮南の下邳という所へ旅に出かけ、歴史の物語りによく出て来る圯橋にたどりついた。圯橋は
周知の如く、前漢創業の功臣である張良（? BC 二六八）がこの圯橋で黄石公老人から太公兵法を授ったという伝説が
ある所である。前漢の高祖の幕下に加わった張良は軍師となり、遂に大功業を立てたのであるが、それは単なる張良
個人の才能が秀れていたのではなく、「人」と「神」が共に一つになって漢帝国が形成されたと力説している。こう
した考え方は当時仏教と道教の信仰が人心をとらえていた社会情況の中で必然的に生まれて来たものと考えられる。

また文末に「力にたよって天道に違き、まぐれあたりの功を求めて、しかもでたらめに行動する者は、ここに戒める
」との警告は、当時社会に於ける汲々として官界権勢利欲に狂奔する者に対しての戒告であろう。彼自身に関する不
平不満をこめた作品が殆んど見当らないのは、やはりそうした考え方がその当時の彼の人生觀の基調にあったからで
あると考えられる。強いて言えば一種の宗教的教養の中にあったといえる。事実彼が大半の生涯を費していた江南地
方で、多くの僧侶と交わっており、それらの僧侶から彼が受けた知識教養の多大な影響を見逃すことはできない。

上人形就而心和、行独而志潔、辱與僕游殆三十年矣。初用文合、晚以道交、淡而文、文而敬、他人未之知也。今
年春予有幽憂之疾、謁長桑氏於東南、上人以無住為樂、將適乎壽陽、相待形骸之外、相忘江湖之上、比夫世間重
事者不同日矣。（上人は立派な風格をもち、しかも心は大変に和かであり、行ないは常時独りであるが、その志は
非常に潔白であった。私は交遊をかたじけなくしていただけで凡そ三十年になる。初めの時は文でもって合し、

後になつては道でもつて交わつた。常に淡々として美わしく、美わしくして、敬重したことは、他人は未だこれを知らない。今年の春に私が宿疾のことで東南地方の安徽省へ赴き、長桑公のような仙人靈術を求めに行った際、上人は私に仏教の根本真理が世の中に常住するもの何もないという説を楽しんで語り、一緒に寿陽に向向いた。私達はとても気が合つて仲良くして、世間に利害関係ばかりを重んじる人とは全く違つた次元の交際であつた。（『全唐文』卷五一八 送靈沼上人遊壽陽序）

と述べていることでもわかるように、彼の一生は仏教道教との非常に深い関係にあったことを物語っている。前述のように、梁肅は四十一歳でなくなつたが、三十余年にも及ぶ靈沼上人との往来は、生涯の殆んどを占め、恐らくは江南に渡つて来た梁肅が自ら積極的に接近してはじまつた交りと思われる。

四

江南地方で転々と流浪している間、梁肅は不幸にして、十六歳の時に父親の達を亡くしている。宿疾足のリュウマチをもちながら、その上父親を亡くしたことは言語に尽せない苦しみと悲しみを味わつていたに違いない。こうした身心ともに苦しみをなめたことが、彼に宗教への関心を一層つのらせることになつたと考えられる。

嗚呼、君之寓江南、年十六而先府君歿、事祖母以至孝聞、在羈旅之中、當離亂之際、貞固而未嘗忘於道、廉讓而未嘗虧於義。（あゝ、君は江南に寓居した際、十六歳の時に父親を亡くし、その後、君は祖母に極めて孝を尽し、戦乱のために生活が苦しくても、廉直で道義を固く守り抜いた）（『全唐文』卷五二三 崔元翰の「梁君墓誌」）

この資料は梁肅の人格をさらにあきらかにするものである。これを読みながら私は、同じ古文作家でしかも彼の先輩に当る李華のことを想起する。李華は安祿山の乱に遭い、その時母親を鄴に残していたので、騒乱中の巷をぬつ

て、母親を車にのせて救出する途中、遂に賊軍に捕えられ、無理矢理に安祿山の下で鳳閣舎人という偽官につけられた。これは李華にとって大きな挫折であった。乱平定後、肅宗の上元年間の頃、李華は中央朝廷から数回にわたって官職につくことを勧められたにもかかわらず、「自らは節を失い、その上母親を亡くしたのに、どうして天子の恩寵を受け得ようか」（『唐書』李華伝）といって、固く召請を辞退した。李華はこうした心境の下で、後に梁肅が生涯の大半を費すことになる常州に近い淮南という所に隠棲し、終始農事と仏事に務めていたといわれている。両者はともに古文作家であるが、孝養の節義を貫ぬく生活態度においても又酷似していた。

五

さて、同じ古文家である李華・獨孤及・梁肅らは、当時における社会思潮の主流であった仏・道二教に対して、どのような態度をとっていたかという問題は重要である。それについて私なりの考察を加えて明らかにしたい。周知の如く、七、八世紀の隋唐時代は、後漢以来外来宗教である仏教が、幾度か天子の奨励もあって、完全に中国社会に定着した時代であり、強いていえば中国的仏教の黄金時代でもあったといえよう。だから中国の知識人の多くは、仏・道二教に帰依するか、それに深い関心を寄せるかのいずれかであり、その影響をなんらかのかたちで蒙っていた。こうしたなかで唐代文学と仏教との関係は、恐らく西洋文学とキリスト教との関係に比しても、それほど過言ではないと思われる。唐代文人たちがどのような時代の社会情況の下で宗教に関心を寄せていたかについてはすでに藤善真澄氏が次のように指摘している。

六朝貴族階級の没落という深刻な不安と動搖に包まれた時代に身を置き、貞観の治に踵を接する武周革命、開元・天宝より安史の乱、更に帝国を蝕む藩鎮宦官の興亡など大唐の繁栄という名の下に、さまざまに織り成され

る榮枯盛衰を経験せねばならぬ文人達にとって、常住の一物もなしと説く仏教の根本真理が、いかに感受せられたであろうか。（中略）唐代文人の宗教觀を特色づけるのは、知識・教養の宗教である。（中略）対句などの修辭

法は、おおむね古典の語句に借りて旨意を表わすから、広博な古典教養の蓄積が文人たる資格を決する。聲譽を得るためには仏典さえも涉獵せねばならず、ことに宗教界に君臨する仏教・道教が科擧の問題に取上げられるとあつては知識人たる者、否応なく研鑽を積まねばならぬ。（『歴史教育』一七—三 唐代文人の宗教觀）

このような時代雰囲気の中で、唐代文人たちが、自然に仏教・道教の教理に対する関心を寄せ、理解を深めることとなる。儒学者であつても仏教道教の教理が一般知識人の備えるべき教養としてあつたとする記事は、今日も数えきれない程残されている。梁肅の「越州開元寺律和尚塔碑銘」もその一例に過ぎないといつてよい。

梁肅の仏教に対する理解は、前述のように若い頃から始まつていたことは確かである。その接し方も、魂の救済を求めるまでには言い難いが、少くとも本心からその教理を愛好していたことは事実である。またそれをこなして自らの生涯を円滑に活かしたのは仏教的教養にあつたといわざるを得ない。この点については同じ古文家でありながら、李華・獨孤及とはそれぞれ異っている。

李華は前述の如く、自ら節を曲げたことを苦にして隠遁し、そこで農業仏事に従事するという一種の挫折感を抱き乍ら、彼の晩年を送つたのである。

獨孤及は古文作家でありながら、儒教を勿論の事、仏教道教にも大きな関心を寄せていたようである。彼は貴族名門の出身でもなく、官位も常州の刺史で終つてゐるが、しかし才能と徳行によつて大変な人望をもつて、世の中に名を知られてゐたことは、李肇の『唐国史補』が記すところである。獨孤及は五十三歳で命を断つたが、其の生涯に李華や梁肅などのように各地を流浪したり、肉親と死別したりするような大きな境遇の変化はなかつたようである。その故か、わりにゆとりのある生き方をしている。その達觀した生き方を可能にした思想はなんであろうか。彼が複雑

な時代環境と社会情況に適應した独特の性格を具えるようになったのは、恐らくは道教的教養によるものであろう。確かに彼が道教に対する理解を示し、それに傾倒した作品は数多く彼の文集『毘陵集』の中に収められている。参考までここに一例を挙げておく。

嗜学好古、誦老子莊子之書、究其大略、罹於多難、未遑筮仕。(学をたしなみ、古を好み、老子莊子の書を誦み、其の大要を究めたが、多難に出遇って、未だに官吏になれないままであった) (『毘陵集』卷一〇「獨孤公第六子萬墓誌」)

と彼の甥に当る獨孤萬の墓誌に述べ、一族ぐるみ道教に深達したことがわかる。また彼が生きていた時代は、たまたま唐の国姓が老子と同じ「李」で、大いに道教を尊び、その道教の創始者であるといわれた老聃に太上玄皇帝の尊号まで捧げて、その廟を建て、列莊の諸道家にも皆諡号を加え、其の書を經典としていた。玄宗皇帝は更に自ら老子を註するまでに至った。獨孤及はこうした時勢に乗り、それを処世に活用していたふしがある。

梁肅の場合は、獨孤及の生きた時代環境とはそれ程大きな相違はないが、彼の教養を考える際、道教よりも仏教教理の理解に重点がかかっていた。それは前述の僧侶靈沼上人との深い交友関係が生き生きと語られていること自体、そのことを充分に裏付けている。このような仏教に対する傾倒と理解の風潮は、梁肅一人だけの問題ではなく、當時の官界・知識文人及び庶民に至るまで浸透し、一種の時代流行現象をきたしていたのである。

六

仏教の各宗派の中でも、梁肅が特に親しんでいたのは、天台宗の祖と称せられる湛然である。湛然は少年時代から学業に秀れ、脱俗の志があったといわれている。玄宗皇帝開元十五年(七二七)湛然が十七歳の時に仏道を求めて浙

東地方を訪ね、金華寺の方巖僧に従って止観の法を受け、十八年には東陽左溪に至って玄明法師についた。その時玄明法師は彼が仏道を学ぶに値する心の広さを持つてゐる人物であることを知り、それで悉く教観の道を教えたといわれている。彼は二十年間専ら天台の教学を学び、天寶七年（七四八）宜興淨樂寺に投じ、始めて剃髪染衣したが、その時三十八歳であつた。その後江南の呉地方で活躍して、天台教の布教をもつて自らその任として、大いに所伝を祖述して文章数十万言を著わしている。また天台教観の奥旨を発揮し、一家圓頓の教を遂げた。天寶より大歴にかけて、玄宗・肅宗・代宗が相次いで召したが、疾ありと称して仲々応じなかつた。其の高風でもつて人に教へ、耆年に至つても倦まなかつた。七十二歳でなくなつたが、実は死後、その碑銘は古文家の梁肅の手によつて著わされてゐる。かくて彼の偉業は実には天台中興の祖として、世に荆溪尊者或いは妙樂大師と称されることになつた。（註四）

この湛然はもと浙江常州地方出身で梁肅が北から南渡して來た時はいまだ常州で住職の身であつた。梁肅は恐らくはこの当時から、湛然に師事したのではないかと考えられる資料がある。

肅嘗受經於公門、遊道於義學、雖鑽仰莫能、而嗟歎不足。（『全唐文』卷五一八「維摩經畧疏序」）

この篇の文末に「甲辰の歳である」といつてゐるが、甲辰の年といへば代宗広徳二年（七六四）に當り、梁肅はまだ十二歳の少年であつた。もしこれが事実であれば、この一篇は最も早い時期の作品であると考えられるが幼年より自らよく湛然の所へ出入りして仏道を学び、一生懸命にその教理を窮めようとしたが、残念ながら湛然師にはとても及ばなかつたと述べて、師の学問人格を慕い、且つ感銘してゐる。また梁肅が二十二歳の時に、僧法禺のために書いた「常州建安寺止観院記」の中でも、湛然法師がそこで天台宗を尊ぶ法義を布教した際に、梁肅自身も止観院に赴いたと言明してゐる。（註五）二十二歳の若さで彼がこのような発言をしたことは、古文だけではなく、仏道においてもかなり深い造詣を具えるに至つたと推測できる。それ以降仏教帰依は長年にわたつて梁肅のなかで變ることとはなかつた。とりわけ彼の天台宗止観に対する分析評価は実にみごとな結晶をみせてゐる。それは次のようである。

夫止観何為也、導萬法之理而復於實際者也。實際者何也、性之本也、物之所以不能復者、昏與動使之然也。照昏者謂之明、駐動者謂之靜、明與靜止観之体也。(そもそも止観とはなにか、それは天地万物流則の理を導びき、そして現実に復帰するものである。現実とはなにか、それは本性の本である。物が能く復らない原因は、昏さと動きがあるからである。昏いものを照らすのは明といい、動きを駐るのは静という、明と静は止観の本体である) (『全唐文』卷五一七 「正観統例議」)

こうした天台止観に対する鋭い卓見は、多く古文家たちの中でも最も秀れていたのではないかと思う。またこれだけに止まらず、彼独特の見識を一層發揮して、天台宗理論の立場から、当時もてはやされていた禅宗を批判するまでに至り、禅宗は伝統的仏教礼法をゆるがめていると強く非難している。

乃馳其智用以符籙葯術為務、而妄於靈台之中、有所念慮、其末也謂齒髮不變、疾病不作、以之為功而交戰於天寿之域、号為道流、不亦大哀乎。(知能を働かせて専ら予言書や藥物治療法のために務めているが、心の中はでたらめで、欲望がある。その結末は齒髮は永遠に変らず、病氣も作らないと謂って、これを以って工夫として、天寿の世界に戦っている。これを仏道の主流であると称しているのは、哀しい事ではないか。)

(『全唐文』卷五一九 「神仙伝論」)

また「天台法門議」篇の中にも、やはりこれと似通った観点で禅宗に対して一層厳しく非難している。これはまた、当時の仏教界内部に起った各宗派の正統性論争の資料としてみても興味深いものがある。

梁肅がこのように、当時の他の古文家と同じく、仏教道教と密切な関係があったことは見逃すことのできない事実である。したがって、彼らの文学思想ないし創作態度を研究する際に、単に古文と儒家思想との関係ばかりでなく、当時の仏教・道教と古文家の生活態度との相互関係はもっと留意されてよいのではないかと思われる。

梁肅が若い頃から、暇な折りによくいろいろな書籍を読んで楽しんでいたことは、前述の「述初賦」からも読みとれる。彼は大変な勉強家であった。またそれにもまして動乱の中の流浪生活が彼の人生経験を豊かにしたのであろう。彼が世に文名を馳せるようになったのは、李華・獨孤及との出逢いによることは注目しなければならない。

年十八、趙郡李遐叔、河南獨孤至之、始見其文、稱其美、由是大名彰於海内。（『全唐文』卷五二三 梁君墓誌）

顧惟小子、慕学文史、初公来思、拜遇梅里、如舊相識、綢繆慰止、更居恤貧、四稔於此。（『全唐文』卷五二三）

祭獨孤常州文

これによると梁肅十八歳の時彼の文章が、始めて古文先驅者の李華と獨孤及に認められ、大いに賞賛されて、それで彼の名声が内外に知られるようになったことがわかる。また、梁肅は獨孤及の文史にわたる学問的造詣を慕って彼に師事し、初めて逢ったときから、昔からの知人であったかのように気が合ったと述べている。意気投合した理由は、彼等がともに伝統的な儒教思想を復興させる必要性があることを痛感して、その思想を文章に力強く表現しようと考えていたからである。事実、彼に多大な影響を与えたのは獨孤及である。彼が獨孤及に就いて学徳を積むようになるのは、大歴九年（七七四）、梁肅が二十二歳の時からである。その時獨孤及は梁肅の居る常州の刺史であった。

嘗謂肅曰、為学在勤、為文在經、勤則能深、經則可行、吾斯願言、勉子有成。又曰文章可以假道、道徳可以長保、華而不實、君子所醜、敬服斯言、敢忘永久。（嘗って獨孤及は私にこう言った。学問に対しては勤勉な態度でなければならぬ、文を作る時には、六經に則^{のつ}とるべきである。勤勉な態度で臨めば立派な学問が深まり、六經に則^{のつ}とれば文章は世に行われる。私はここで君が勉励して後日成功することを期待する。また文章は道によつて作り、道徳は長く保つべきである。華麗であつても、内容が乏しければ、それは君子の恥とする所であるともい

った。獨孤及のこの教えに対して、私は深く感銘し、敢て永久に忘れることはない（『全唐文』卷五二一 祭獨孤常州文）

これは、獨孤及が自分の後輩でもあり、弟子の關係でもある梁肅に、學問や文章を為す場合に、どのような態度で臨むべきかについて説いたものである。つまり文章は易・書・詩・春秋・礼記・樂記などの經典に則^{のつ}とるべきであって、華麗に流れ、思想内容が乏しいものとなつてはならないという載道文學觀に立脚して教示したものと考えられる。梁肅もこのことを後々まで深く意識し、とりわけ文章の創作に當つてはよく反映させている。なおこの二人の古文作家の深いつながりについては、梁肅とはほぼ同時代の李舟が『獨孤及文集』の序文で次のように紹介している。

（獨孤）常州愛士、而肅最為所重、討論居多、故其為文之意、肅能言之。（獨孤及は善く學者を可愛がつていた。その中でも梁肅は最も重んじられ、學問に対する考えをかわす機会も多かった。故に獨孤及の文を作る意圖については、梁肅は能く述べることができる）（『全唐文』卷四四三 獨孤常州集序）

この李舟の序文は、獨孤及と梁肅二人の文章認識が完全に一致していた事実を物語っている。

しかし、師事して三年もたたない、梁肅二十五歳の時、彼の最も敬愛する師であつた獨孤及が世を去つた。時に大歷十二年（七七七）四月のことである。その年の秋に梁肅は獨孤及の遺稿を整理し、これを文集にしたが、その序文の中で、獨孤及の文學的態度を次のように述べている。

故道德仁義、非文不明、礼樂刑政、非文不立、文之興廢、視世之治乱、文之高下、視才之厚薄、唐興、接前代澆醜之後、承文章顛墜之運、王風下扇、舊俗稍革、不及百年、文体反正、其後時寢和溢、而文亦随之、天寶中作者數人、頗節之以礼、洎公為之、於是操道德為根本、總礼樂為冠帶、以易之精義、詩之雅興、春秋之褒貶、屬之於辭、故其文寬而簡、直而婉、辯而不華、博厚而高明、論人無虛美、比事為實錄、天下凜然、復觀兩漢之遺風。（『全唐文』卷五一八 常州刺史獨孤公集後序）

これは時代状況とその中での人間の精神生活が、真先に反映するものが文章であるという発想に立つ梁肅が、唐の天宝年間になって、六朝以来長く頽廢していた文章の道を、再び復興した数人の古文家の存在に言及しながら、獨孤及の時に至って道德を根幹となし、すべて礼樂を優先させ、易の精義、詩の雅興、春秋の褒貶等をみな文章の中にとり入れ、それで兩漢時代の遺風が再び見られるようになったと絶賛している。これはそのまま梁肅自身の文学創作に対する姿勢を吐露したものと解釈してもよいであろう。そこには、六朝時代から伝わってきた華麗さを重んじる文学的風潮を改め、儒教的礼義道德に基づいて、文章をたてなおそうという意図がありありと窺われる。

八

梁肅の文章觀は、彼が古文家李華の子供である李翰の文集にあたえた序文の中に一層鮮明なかたちで顕在している。

文之作、上所以發揚道德、正性命之紀、次所以財成典礼、厚人倫之義、又其次所以昭顯義類、立天下之中。三代之後、其流派別、炎漢制度、以霸王道雜之、故其文亦二、賈生・馬遷・劉向・班固其文博厚、出於王風者也。

枚叔・相如・揚雄・張衡其文雄富、出於霸塗者也。其後作者、理勝則文薄、文勝則理消、理消則言愈繁、繁則乱矣。文薄則意愈巧、巧則弱矣。故文本於道、失道則博之以氣、氣不足則飾之以辭、蓋道能兼氣、氣能兼辭、辭不當則文斯敗矣。(文の作りは、先ず道德を發揚し、性命の紀を正すものであり、次に典礼を裁成し、人倫の義を厚くするものであり、更にその次は義を明らかにして、それを世の中に立てるためであった。夏・殷・周三代以降は、それぞれ流派に別れ、漢代の時代には霸道と王道というものが文章の道に入りまじった。だから其の文章の流れも二つに別れてしまった。賈誼・司馬遷・劉向・班固らの文章は広くゆきわたって深い、いずれも王道

から発したものである。枚乗・司馬相如・揚雄・張衡などのような辭賦作家は、その文章は豊かで雄渾の氣にあふれ、いずれも霸道から発したものである。それ以降の作家たちは、内容が勝れば美しさが乏しくなり、美しさが勝れば逆に内容が消えてしまう。内容が消えれば言葉は愈々繁雜になり、言葉が繁雜になれば文章は乱れてしまう。文章の美しさが薄ければ文章の意が愈々巧みになり、文章の意が巧みになると文章が弱くなってしまう。だから文は道を根本として、道が失えば氣でひろめ、氣が足りなければ辭で飾る。したがって道は能く氣を兼ねて、氣は能く辭を兼ねる。辭がびったりこなければ文も失敗である）（『全唐文』卷五一八 補闕李君前集序）

梁肅は文章の立脚点を王道の「博厚」と霸道の「雄富」とに分けているが、これは恐らく当時の古文作家たちが文を為す時の一つの指標となっていたものと思われる。しかもこれは先驅的古文作家の中でも、初めての指摘ではないかと考えられる。

そもそも王道と霸道との區別を、思想として強調したのは孟子である。孟子は戦国列強の富国強兵の權力政治を霸道としていやしめ、この霸道に対して仁義を理想とする王道こそ国君の採るべき最も正しい道だと説いた。梁肅はこの孟子の発想を土台としてこれを文学認識の問題として取り上げたのである。これが韓愈をして、孟子の存在を再認識させることになる一つの要因ともなっている。

九

王定保の『唐摭言』卷七の記事を見ると、韓愈は李観・李絳・崔羣らとともに梁肅の門に出入りして勉強したとあり、また韓愈の「興祠部陸員外書」によれば、徳宗貞元八年（七九二）二十五歳の時、韓愈が進士科に及第したのも梁肅の推挙があったからだである。韓愈自身も梁肅の学問姿勢を慕っていたことは、すでには宋代孫光憲の『北夢瑣

(註七)

言」にも指摘されている。とくに文章が道に基づくものとする考えは、梁肅が韓愈に与えた影響ではないかと思われる。韓愈のいわゆる「道」については、「原道」篇に次のような発言がある。

斯れ吾が謂う所の道は、向に謂所の老と仏との道に非ず。堯は是を以てこれを舜に伝え、舜は是を以てこれを禹に伝え、禹は是を以てこれを湯に伝え、湯は是を以てこれを文武周公に伝え、孔子はこれを孟軻に伝う。軻の死するや、その伝うるを得ず、荀と揚とは、忤んで精しからず、語って詳かならず。(『韓昌黎文集』卷一原道)

韓愈の主張する「道」とは、堯舜から文武・周公・孔子・孟子まで伝えられて来た儒教的な道である。李華・獨孤及・梁肅・韓愈らが提唱した古文改革は、この儒教道徳を中心とした「古の道」を復興することを目的としていた。古の辞を学ぶことは、古の道に通ずる手段であったのである。それで「文」と「道」は必ず結びつかねばならず、「文」に「道」がなければ「文」の目的が達成できず、同時に「道」に「文」がなければ「道」の実践に達することが不可能である。韓愈と梁肅らいわゆる先驅的古文作家たちとの間においては、「文」と「道」とが密切な関係にあると主張する点で一致していた。

「補闕李君前集序」における梁肅の文学史観は、夏・殷・周三代の後、学問思想にそれぞれの流派が起り、漢時代に入ると、はつきりと二つの大きな流れが現われたと指摘している。その一つは、儒家の伝統的「王道」に立脚した賈誼・司馬遷・劉向・班固らの文章表現がその代表であるとし、もう一つは力強く美麗辞句を用いてはでな表現をした辞賦作家の枚乗・司馬相如・揚雄・張衡などが「霸道」に立脚した文学集団であるとみている。これは梁肅独自の見解である。

更に梁肅はこの序文の中で「文は道を根幹として、道が失われれば氣でひろめ、氣が足りなくなれば辞で飾ることになる」と論じ、それまでの古文家たちに見られなかった「文氣説」を初めて提唱していることは誠に興味深い。こ

れは、蕭穎士・李華・獨孤及らが重視していた「經典」「道德」を重視する教化主義的文学觀を更に發展させたものであるが、こうした道と氣と辞との關係に注目したユニークな見解は、唐代古文發展過程において重要であり、見逃してはならない。こうした意味で、梁肅は「文氣說」の面においても、後の韓愈に示唆を与えたのではないかと考えられる。^(註)

韓愈の「道」と「文」或いは「文」と「氣」についての考察は次のようなものである。

夫所謂文者、必有諸其中、是故君子慎其実、実之美惡、其発也不揜、本深而未茂、形大而聲宏、行峻而言厲、心醇而氣和、昭晰者無疑、優游者有餘、体不備、不可以為成人、辞不足、不可以為成文。(夫れ所謂文は、必ず諸を其中に有す、是の故に君子は其実を慎む。実の美惡、其発するや揜れず、本深くして未茂り、形大にして声宏く、行峻くして言厲しく、心醇にして氣和らぐ、昭晰なる者は疑い無く、優游なる者は余り有り、体備らざれば、以て成人と為す可からず、辞足らざれば、以て成文と為す可からず)(『韓昌黎文集』卷十五 答尉遲生書)

ここで韓愈のいわゆる「実」は、すなわち「古の道」を指す。つまり人間の体内に心があり、外には体がある。文の中には実があり、時には辞^{ことば}がある。どちらも文人と「道」の修養とは關係あることを指摘しているのである。しかし、文人がただこの「道」を修養するだけでは十分でなく、適切な「辞」^{ことば}を的確に用いることによって、「道」を表現してこそ始めて「文」というものができると考えているのである。この点において韓愈は梁肅より詳^{つまびら}かであり、また具体的である。韓愈の文章の秀れた点は、自由自在にしかも殆んど獨創的な表現を活かしながら、仁義の道に參入することを忘れていないことである。例えば「李翊に答うる書」において文を作る時の態度を次のように述べている。

愈の為す所、自ら其の至るや猶は未だしきやを知らず。然りと雖も、これを学ぶこと二十余年。始めは三代兩漢の書に非ざれば敢て觀ず、聖人の志に非ざれば敢て存せず、処^おるときは忘るるが若く、行くときは遺るるが若

く、儼乎として其れ思ふが若く、茫乎として其れ迷ふが若し。其の心に取りて手に注ぐに当りては、惟陳言之れ務めて去る。……これを仁義の途に行けり、これを詩書の源に遊ばしめ、其の途に迷ふこと無く、其源を絶つてと無くして、吾が身を終らんのみ。氣は水なり、言は浮物なり。水大にして、而して物の浮ぶ者大小畢く浮ぶ。氣と言とは、猶ほ是くのごときなり。氣盛んるときは、則ち言の短長と、声の高下とは皆宜し。（『韓昌黎文集』卷三）

このように、先驅的古文家の中ではじめて梁肅が唱えた「文氣説」は、韓愈の時代になってより具体的にすばらしい成果をあげている。韓愈は「氣」を「水」にたとえ、「言」を水に浮んだ物にたとえて、「氣」と「言」（梁肅の立場から見ると、ここで言う「言」は彼の言う「辞」に等しいと考えられる）との関係は、水とその上に浮んだ物との関係であるとみる。ここに至って唐代の古文家は「道徳」を根底に据え、氣を重視し、なにもものにも束縛されずに、それぞれ己の意を表現することが重要であると古文作家たちは主張したのである。そうしなければ長い間中国知識人の意識を束縛して来た四六駢麗文の風潮から脱皮できなかったのである。

註 (一) 林田慎之助氏の「唐代古文運動の形成過程」は日本中国学会報第二十九集に所収。

(二) 高祖父趙王府記室宜春公、洎曾王父侍御史府君已降、三世居陸渾、有田不過百畝、開元中爲大水所壤、始徙於函關。 (『全唐文』卷五一七 過舊園賦注)

(三) (a) 岑仲勉氏の『唐集質疑』過舊園賦の項。

(b) 神田喜一郎氏の「梁肅年譜」は『東方學論集』東方学会創立二十五周年記念に所収。

四望月『佛教大辭典』湛然の項参照。

(五) 沙門釈法禹、啓精舍於建安寺西北隅、與比丘勸請天台湛然大師、轉法輪於其間、尊天台之道以導後學、故署起堂曰止觀。(中

略) 小子委遊師門、故不敢不志、時大歷九年冬十一月日記。(『全唐文』卷五一九 常州建安寺止觀院記)

(イ) 貞元中、李元賓・韓愈・李絳・崔羣同年進士、先是四君子定交久矣、共遊梁補闕之門。(王定保『唐摭言』卷七)

(ロ) 唐代韓愈・柳宗元・李翱・李觀・皇甫湜數君子之文、凌轢荀孟、糠粃顏謝、其所宗仰者、唯梁補闕一人而已・乃諸人之龜鑑・而梁之聲采寂寂、豈陽春白雪之流乎、是知俗塵喧喧者、宜鑑其濫吹也。(孫光憲『北夢瑣言』卷六)

(ハ) 梁肅の「文氣説」が韓愈の文学觀に与えた影響については、既に林田慎之助氏の「韓愈の文章表現論」(『文学研究』第七十二輯、九州大学文学部創立五十周年記念論文集所収)が詳細に論証しているので、それを参考にした。